

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2017年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻			
研究代表者 (2018年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士前期課程3年		松本 麻里 印	
指導教員	所属・職名		氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・特任准教授		小谷 真理子 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 社会	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名	
研究課題	対面相互行為における非言語行動の研究：日本語および韓国語話者の会話を事例に			
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2018年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻・ 博士前期課程・3年		松本 麻里	
研究期間	2017 年度			
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 100,000 円 / (採択金額) 100,000 円			

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、会話において聞き手がどのように参与しているのかを明らかにすることを目的とした。特に、聞き手が話に協同的に対応し、発話だけでなくジェスチャーを伴い、話しを進める上でどのような役割を果たしているのかを明らかにすることを目指した。その際言語や文化で共通点の多い、日本語母語話者と韓国語母語話者それぞれのアニメーション説明課題データを用いて異文化間の比較を行い、類似点と相違点を探った。その結果、聞き手の参与方法として見られたのは、日韓合わせて8種類見られ、その8種類は参与の度合いの強さによって一つの連続体に配置できるのではないかと考えた。日韓の異なる聞き手の参与方法としては、相づちの打ち方が異なることが観察された。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[非言語コミュニケーション] [日韓比較] [聞き手]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. はじめに**

私たちは誰かとコミュニケーションをする際、自分の経験したことについて、その話を知らない誰かへ話すということがよくある。その際、話し手である人は、相手がどこまで話を知っているのかを確認して話し始めたり、話の途中でジェスチャーを使って話したりしながら、話を進めていくだろう。では、そのような場面において聞き手となった場合、私たちはどのように話を聞いているのだろうか。

2. 目的

本研究では対面的相互行為において、聞き手が会話にどのように参与しているのかを明らかにすることを目的とした。特に、聞き手が話に協同的に対応し、発話だけでなくジェスチャーを伴いながら話しを進める上で、それがどのような役割を果たしているのかを明らかにすることを目指した。その際言語や文化で共通点の多い、日本語母語話者と韓国語母語話者それぞれのデータを用いて異文化間の比較を行い、類似点と相違点を明らかにした。データ収集方法としては、アニメーション説明課題を用いた。従来の先行研究では、言語心理学的な立場から、個人の中でのジェスチャーがどう産出されるのかという観点に基づいた、いわば話し手中心の研究が行われてきた。また韓国語会話におけるジェスチャーの研究は西欧や日本の研究に比べて研究が少ないのはもちろんのこと、日韓比較研究はさらに少なく、会話に伴うジェスチャーの産出という観点からの調査も管見の限り行われていない。聞き手の研究においては、最近発話レベルでの研究（特に相づちの研究）が異文化比較によって行われている反面、非言語に注目した研究は少なかった。本研究では、以下3つのリサーチクエスチョンを立てた。(RQ1) 説明場面において、話し手の説明に対して、聞き手はどのように参与をしているのか、(RQ2) その際お互いのジェスチャーや視線などの非言語的行動がどのような役割を果たしているのか、(RQ3) 文法に類似点が多く見られる日本語と韓国語において、ジェスチャーや視線にどのような類似点と相違点が見られるのか。以上のリサーチクエスチョンに立ち分析を行った。

3. 結果

本データにおいて聞き手の参与方法として観察されたのは、日韓合わせて8種類であった。その8種類は、参与の度合いの強さによって一つの連続体に配置できるのではないかと考えた。一つ目に、話し手からの働きかけが最も強いものとして、話し手からの質問によって聞き手が応答をし参与する事例(1)が見られた。二つ目に、話し手が「なんだっけ」という言葉と「視線」を聞き手に向け聞き手が応答する事例(2)が見られた。その事例との比較のために、「なんだっけ」という言葉が用いられたが「視線」が聞き手に向けられず、聞き手の参与がなかった事例を示し、視線が重要であることを示した。三つ目は、話し手の「～だっけ」という発話によって、聞き手が参与する事例(3)が見られた。四つ目は、話し手が発話上、明示的に参与を促す言葉は用いないが、「言いよどみ」や「間」を用いて暗示的に聞き手に参与を促し、聞き手が参与する事例(4)が見られた。五つ目に見られた聞き手が相槌によって参与をする事例(5)は、日本語・韓国語データの両方を比較した。日本語・韓国語において類似点相違点が観察され、RQ3に対応する結果にもなった。六つ目は、話し手が行なったジェスチャーを聞き手が類似のジェスチャーを行うことによって参与する事例(6)、七つ目は、聞き手が話し手と共同的にジェスチャーを行い参与する事例(7)が見られた。最後に、聞き手が最も自主的に参与をするものとして、聞き手から質問を行う事例(8)が見られた。

研究成果の概要 つづき**4. 考察**

3の結果から、先行研究を踏まえ4つの考察を行った。

第一に、話し手と聞き手という役割が決まっている韓国語会話の中で、話し手が知識を持っている状況で聞き手に質問し、それに聞き手が応答する場面が観察された。教師と生徒のやりとりを観察されている「I (initiation) - R (reply) - E (evaluation)」連鎖と同一の連鎖であると考えられた。教室という状況ではないものの、アニメーションの内容についての知識を持っている話し手が先生のようになり、知識を持っていない聞き手へ「質問」ということが観察された。

第二に、日本語と韓国語における「何だっけ」と「視線」の関係、そして「何だっけ」に伴うジェスチャーの機能についてである。日本語の「何だっけ」と韓国語のそれと同義の「뭘지」という発話のあと、聞き手が参与するかどうかは話し手の視線の向け方が重要であることが観察された。

第三の観察は、相づちについてである。聞き手の相づちの位置、頻度、種類という観点から日本語話者と韓国語話者それぞれ考察したのち、日韓比較を行った。まず両言語の類似点は、日本語と韓国語両言語で「反応機会場」(西阪, 2006, 2008)が見られた。これは日本語と韓国語の文法形態が類似していることに起因すると考えられた。一方相違点としては、相づちの種類が挙げられた。日本語話者は反応機会場において、「うん」による相づちが多く観察されたが、韓国語話者は細かい「頷き」によるものが多かった。したがって、両言語は相づちの種類や頻度が異なることがわかった。

第四に、従来のジェスチャー研究では観察されていなかった話し手と聞き手の共同的なジェスチャーが観察された。話し手のジェスチャーに対し、聞き手もジェスチャーによって場面の説明に貢献するという事は、聞き手が話し手に対し強い理解を示し参与を行なっているといえる。

5. 限界と課題

本研究の限界と今後の課題は、さらなるデータの収集と分析・観察が必要であることが挙げられる。今後、異言語間の会話を分析する際にどのような点に着眼すると比較可能なのか、研究環境などを検討し、緻密に研究する必要がある。異文化コミュニケーションによって引き起こされる齟齬を解消するために今後も研究を深めていきたい。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

なし

② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

なし

④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

松本麻里、「聞き手の会話への参与方法ーアニメーション説明課題における日本語および韓国語会話の分析ー」、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 2017年度修士論文、2018年3月